The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	懐徳堂講座講演要旨
Author(s)	武田, 恒夫; 河野, 元昭; 佐々木, 丞平 他
Citation	懐徳. 1983, 52, p. 76-82
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90616
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈懐徳堂講座講演要旨〉

近世画壇――人と作品――昭和58年春季

狩野探幽

武田恒夫

「東照宮縁起絵巻」や「新三十六歌仙絵」など、濃彩による細密画を、狩野探幽（一六〇二―七四）はいくつか手がけている。それらの画面にもし落款がなかったならば、狩野派の絵とは信じられないほど和画の様式で終始されているのである。

『本朝画史』をはじめ、近世の諸画人伝は、何れも例外なく、探幽によって狩野派の画風が一変したことを伝えている。それは、一体何を意味しているのであろうか。近世画壇のさまざまな展開を考える上でも、重要な意味合いを示しているように思われる。

徳川幕府の奥絵師として、公儀の御用を精力的に果したばかりでなく、新しいアカデミズムの確立をめざした探幽の功績は無視できない。しかし、他方では、大量にのこされた縮図や写生帖を通じて、日中の古典や周辺の自然に対し、いかに深い関心をよせていたかがうかがわれる。そのような袴を脱ぎすてた制作態度が、近世画壇に大きな影響をもたらすことになったのであろう。

戦前では、雪舟とならぶ破格の人気が、戦後はひどく低下してしまった。理由はさまざま挙げられる。しかし、近年になって、探幽を近世画壇の和様化路線の先駆者として、再評価しようとする気運が高まってきたのも事実である。漢画臭をおびた水墨画よりも、むしろ洒脱な趣きをねらった墨絵に、探幽の本領が発揮されたこととも、それは無縁ではなかったように思われる。

尾形光琳

河野元昭

尾形光琳の名は「燕子花図屏風」（根津美術館蔵）、「紅白梅図屏風」（MOA美術館蔵）の二大傑作とともに、親しく記憶されています。この二つの屏風は、光琳を代表するのみならず、日本美術の象徴であるといっても過言ではありません。日本美術のもっとも大きな特質である装飾性が、きわめて印象的に、非の打ちどころなき完成度をもって示されているからです。

あの華やかにして実に人間的な元禄文化は、松尾芭蕉、井原西鶴、近松門左衛門、菱川師宣、そしてこの尾形光琳といった天才的芸術家によって築かれました。ただ、わたしたちは元禄文化全体のイメージを、光琳の二大傑作によって初めて思い浮かべることができるのだといってもよいと思います。

光琳は京都の裕福な呉服商の次男に生まれました。乾山焼で有名な陶工尾形乾山は彼の弟です。経済的にも文化的にも恵ま

れた環境に育ったのですが、放蕩のため父の遺産も使い果たして破産してしまいます。その生活ぶりは『好色一代男』の主人公世之介さながらのものでした。そこで四十歳ごろ趣味として習っていた絵画をもって身を立てることを決意、創作活動を本格的に開始したのです。間もなく法橋に叙せられ、一応画家として社会的評価を得るようになりました。宝永年間五十歳前後のころ一時江戸へ下って生活しましたが、のち京都へ戻って画風の大成を力強く推し進め、享保元年（一七一六）五九歳の生涯を閉じました。

本講座ではスライドによって光琳の代表的作品を鑑賞しながら、その美的特質の近世絵画史上における位置について考えてみたいと思います。

与謝蕪村

佐々木丞平

蕪村は享保元年（一七一六）摂津国東成郡毛馬村（現・大阪市都島区毛馬町）に生まれた。彼の生地、家系、父母等のことについては、口碑に伝えるほか、ほとんど知ることができない。しかし、少なくとも彼の故園の地が毛馬村であったことは疑えない。

二〇歳前後には江戸へ出、夜半亭と号した俳諧師早野巴人（宋阿）の弟子となって俳諧の道にいそしむが、蕪村二七歳の年、師宋阿が没するとまもなく江戸を去り、約一〇年間、放浪の旅が続く。この頃から画人蕪村としての足跡を明確に残すようになるが、画家としての本格的な活動は放浪の旅を終えて京に帰った宝暦元年、蕪村三六歳の頃からであろう。以後、天明三年（一七八三）六八歳で生涯を閉じるまでの蕪村の画業を追ってみようというのであるが、蕪村の絵の魅力は、一つには俳画、今一つは山水図にある。

ここでは特に山水図に焦点をあて、次のような順序で整理をしつつ、その展開の跡を追ってみることにする。

(1)丹後時代
(2)屏風講時代
(3)讃岐時代
(4)夜半亭継承期
(5)謝寅時代

圓山應擧の人と作品

橋本綾子

圓山應擧（一七三三―九五）は日本絵画史上初めて写生派を標榜する一派を立てたことは周知の通りである。門人の奥文鳴が「性布置に巧みで最も写真に長ず」と述べるように、斬新な構図と実感に基いた写生は、形式化した狩野・土佐に飽きた京阪市民を魅了し、「京中の絵が皆一手になるほど」の繁栄を示した。だが一方では、曽我蕭白が應擧を「図面描き」と侮り、南画家や中国尊重の知識人は「古意を得ず」と評して彼を無視

したことも諸書は伝えている。應擧は知識人よりも市民に愛され、新興商人層に大きな支持を得る画家であった。

しかし絵画史上その画風を考えるとき、平明な写生が画壇に新風を吹きこんだばかりではなく、従来の粉本主義を捨てて実物に向かい、物の遠近や立体性を表現しようとしたことは画期的なことである。また身近かな自然のありのままなる描写や情味溢れる表現は、人々に豊かな感性と芸に遊ぶ喜びを与えたであろう。彼の画風には、輸入玩具の眼鏡絵のもつ遠近法が与っているが、それを本画にとりいれるとき、常に日本の伝統に収斂し、「付立て」「刷毛描き」「片暈し」などの新技法を編み出すことによって推進した。その誠実と創意と努力には驚ろくべきものがある。日本絵画の近代化―少くとも写実的側面―は、應擧によって方向づけられ、本流にのせられたと言っても過言ではない。その應擧の画風の展開について、彼の人柄をも含めて若干の考察を試みたい。

司馬江漢

成瀬不二雄

司馬江漢（一七四七―一八一八）は、江戸時代後期の生んだ洋画の先覚者として知られているが、それとともに西洋自然科学の紹介者、随筆家、進歩的思想家、人生の哲学者としてもすぐれた業績を遺した。ところが、これまでも江漢の業績についての研究は多くあったが、皮肉なことに彼の本職とする絵画に関するものが少なかった。彼の作品研究がおくれた理由の一つとして偽作の横行がある。もちろん、最近では江漢の真作が数多く紹介されるようになり、真作と偽作とを分ける作業も、かなりの確実度をもっておこなわれるようになった。しかし、その結果洋画の先駆者としてのみ有名であった江漢の画業が意外に複雑であり、江戸時代後期の画壇における画風の多様化も反映して、なかなか一概にとらえがたいこともわかってきた。

一方、江漢自身が自分の経歴について、しばしば嘘や誇張を言うこともあって、正確な江漢伝を書くことは今日でもなかなか難しい。今回の講演においては現在のところ最新と考えられる知識に基づき、司馬江漢の経歴と画業について略述する。また、限られた時間内ではあるが、できるだけ多くのスライドを使って、複雑な江漢の画業の真姿に触れていただくつもりである。そして、多彩な江漢の画業のうち最も重要なのは、西洋画法による日本風景図を開発して、北斎や広重の風景版画に大きな影響を及ぼしたことであることを明らかにしたい。

富岡鉄斎

金沢弘

東洋には「画は勧戒のために資す」という思想があり、すでに中国最古の画論である、唐時代の『歴代名画記』の冒頭に張彦遠は次のように記している。「画は教化を成し、人倫を助け、神変を窮め、幽微を測る。六籍と功を同じくし、四時と並びめ

ぐり天然に発し、述作によるに非ず」

絵画は単なる芸術的な目的のためだけに描かれるものであってはならない。人の道を教え、範をたれ、諸々の儒書にも匹敵する働きを備えていなければならない。また作為的に作られるものではなく、四季の変化のように、おのずから発するものこそが優れた絵である、というような意味である。この汎東洋的で儒教的な考えは我国においても近代に至るまで万能的であったが、なおかつ最も端的にこれを実践したのが鉄斎である。

「私の画を見てくださるなら、第一に画賛から読んで貰いたい。私は意味のないものは描いていないつもりじゃ。展覧するのに花鳥画がないと寂しいというので二、三点描いた。然しあれは婦女子に見せるものじゃ。私は画家ではない。儒者だ」。これは晩年の鉄斎の言である。

幕末から明治、大正に至る九十年の生涯、七十年の画作の歴史を通じて、富岡鉄斎の豊かな色彩と力強く、たくましい墨線、画面一杯に広がるダイナミックな構図をもち、多彩な画態と画様をもつ優れた絵画をみながら、現代にも生きつづける鉄斎の大きさ、底の深さについて考えてみたい。

上方ことばの世界——昭和58年秋季

細雪の言語生活

和田　實

細雪は一組の家族親類の、昭和十年代足かけ六年間の物語。世相風俗の事細かな描写、そこから言語生活という面を採上げると、緻密な具体的な事例が豊富に得られる。その大抵のことは今も通用しそうである。

例えば、子どもと言葉。大阪から東京へ転住して一年がたち、「みんな大きうなつたわなあ。大阪弁使うてくれなんだら、何処の子達やら分らへん」「秀雄と、芳雄と、正雄ですよ。彼奴等みんな東京弁が巧いんだけれど、叔母さんに歓迎の意を表して、大阪弁を使つてるんですよ」と、中学生の兄が説明する。／芦屋に住むドイツ人一家に幼い兄妹が居て、電車ごっこに阪神電車の車掌そっくりの口調で遊ぶ。そのくせ青桐の木をアオギリギリと言いちがえ、アサッテでなくミョーゴニチと言うので日本人小学生の方が面くらう。／けしの花のもつ無気味さを「吸ひ込まれさうな」と巧みに形容して、大人を感心させる悦子。……

ましてや、幸子雪子妙子貞之助お春ら主要人物の言語生活の百態を、作者は余す所なく写す。人々は自他の話しぶり言葉づかいに、発音に調子に、絶えず意識あり内省あり批判がある。

こうして作中五度の見合の話は五度とも、言葉への方言への関心にまとわれつつ展開する。

細雪はそういう一特徴をもつ長編小説である。単に作中大阪弁の正否を云々するに終ったり、細雪をそっちのけに古き懐しき大阪弁が崩れゆくのを歎いて終ったりするのは惜しい。

御所ことばについて

堀井令以知

御所ことばは、内裏や仙洞御所において、宮中女官が用いはじめた奥向きの仲間ことばである。最古の文献で御所方のものとしては、恵命院権僧正宣守の『蠟葉屑（あまのもくず）』がある。この書には、「内裏仙洞二八一切食物異名ヲ付テ被召事アリ」として、応永二十七年（一四二〇）ごろのお局生活で使用された御所ことば（女房ことば）が記されている。飯をクゴ、酒をクコン、餅をカチン、味噌をムシといい、当時の庶民とは異なる語を使用した。武家方の御所ことばとしては、足利義政時代の『大上臈御名之事』に、はじめて女房ことばという術語が用いられ、魚をオマナ、鯉をオヒラ、鯛をコモジ、かまぼこをオイタ、蛤をオハマ、小豆をアカのような語が記されている。

御所ことばが豊富に用いられている『お湯殿の上の日記』は、主として禁中お湯殿の上の間に奉仕する女房が交替で記したものである。天皇の御動静を中心に、儀式、献上物、事件などを記述し、文明九年（一四七七）から正本あるいは写本で伝わり、刊本も貞享四年（一六八七）まで出ている。この日記には「御わたくし」のような用例が見出されるなど、御所ことば研究のため有益である。

明治維新まで京都御所で用いられた御所ことばは、宮中のほか、京都・奈良の尼門跡に存続している。われわれは尼門跡の御所ことばを調査し、その実態を明らかにすることができた。

関西ことばの基層—ことばと文化—

寿岳章子

関西出身で関西に在住の研究者には、濃厚に関西のことばで話す人が多い。こういう現象は他地方ではどうだろうか。出身地でそのまま活躍出来るという条件はそうあるものでないから、おそらくはかなり特異な現象であろうが、そのことの意味は重い。

言語は文化に密着している。あるいは、言語によって文化はつなぎとめられている。関西のことばは、その点、関西文化の支え手そのものであると言ってよい。

では、それはどんな性格のものであろうか。言語には大きく言って、通達的なものと感化的なものとがあるが、関西ことばはもちろん共通語の通達性のみでは存在し得ない人間の内なるもう一つの存在をすくいあげる。それは実に多方面にわたっている。もう一つのものの言い方、もう一つの表現法。関西こと

ばの強みは、その特有のレトリックとでも言いたい世界の広さと深さにある。

「させて頂きます」という表現がとみに東京方面に進出しつつあると言う。ある人々によれば、それは眉をひそめさせるいやらしい表現であるようだが、関西の人間には決してそうではなく、むしろこころよい語り口である。あるいはとりわけ京都のことばの特徴とも言える「はる」の万能の力、さらには無生物に敬語を使うという現象。それらにはたしかなものの見方、一種の世界の構成の力がはたらいている。「文化」には、そういうものである一面が強固に存在するのではなかろうか。

『日本言語地図』からみた上方ことば

徳川宗賢

国立国語研究所は、昭和三十二年から四十年にかけて、北海道から沖縄まで、全国二四〇〇地点で単語の地域差に関する方言調査を行った。調査員が現地におもむいて、明治生まれの故老から、直接その土地のことばを教えてもらった。均質な資料を得るため、全国各地での調査を統一して行うよう、いろいろの工夫がこらされていた。

その結果は『日本言語地図』六巻、三〇〇面の方言分布地図として公刊されている（現在、縮刷版刊行中）。

ここでは、その方言分布地図のなかから、(1)全国的な方言分布の中での上方ことばの位置――上方ことばの勢力範囲はどこまでか、上方ことばの西日本的性格など、(2)近畿地方内部にみられることばの地域差――京都弁と大阪弁の違い、浪華ことばの影響を受けやすい地域など、(3)標準語と上方ことばの関係――標準語になった上方ことば、関東弁の上方への影響など、を中心にとりあげて、『日本言語地図』からみた上方ことばの性格を考えてみたい。

上方の地名

鏡味明克

地名の歴史的価値はその永続性にある。平安時代の建物の残っていない洛中で、目に見える形で残っている平安京はその地名である。四条高倉と書かれたバス停に立てば、平安京の四条と高倉の交差点にいることが実感される。このような通り名の、座標式の表示は、長いようで合理的、上ル下ル東入ル西入ルを加えて町名番地いらずのわかりやすい生活地名になっていることは京都の地名の大特色だ。

京と大阪の、ドスとダス、オスとオマスのようなことばの相違は地名型にも多少ある。京都の小路（こうじ）は大阪でショウジ、京都の夷（えびす）（蛭子も）は大阪で戎（えびす）の字が使われる。

大和や京都の古代地名や大阪の商都的な地名、神戸の洋風地名など、各地域の個性的な地名を見てゆくが、とかく全国的に東京志向の安易な模倣地名がふえている中で、古い歴史と現代の多様な発展を持つ上方の地名の個性特色がますます発揮され

ることが望まれる。たとえば、南北を主体とする筋と東西の通りの使い分け、チョウかマチかが漢字で分かる和歌山市の橋丁、北町などの町名の書き分けなどのすぐれた点を評価したい。また住宅地の名、文の里などの～里も、関東的な、むやみに高台を売物にする～台の名が、関西でも急増している今日、上方的な名称として見直されてよい。

一方、十条（京都）、朱雀（奈良北郊）のような史実に反する歴史名称の現代地名としての使用はこまる。歴史的地名の正しい継承を計ることは歴史ある地域としての上方の責務であろう。

表現法の地域差

佐藤亮一

関西方言における文法・表現法上の特徴といわれるものの地理的分布を見ると、仮定表現の「タラ」（雨が降ッタラ）や依頼表現の「～シテホシイ」のように主として近畿地方にのみ見られるものから、動詞の打消過去形の「ナンダ」（行カナンダ）のように、中国・四国、あるいは中部地方を含む比較的広い地域に分布するもの、さらに動詞打消形の「ン」「ヌ」（書カン・書カヌ）のように、中部地方から沖縄までの西日本全域に広がっているものまで、広狭さまざまである。なかには、接続助詞の「サカイ」（雨が降ルサカイ）およびその変化形「サケ」「スケ」のように、東北地方の日本海側に及んでいる関西弁的事象も見られるし、謙譲表現の「～サセテ（サシテ）イタダク」のように東京ことばにとり入れられてしまった関西弁的特徴も少なくない。

ここでは、国立国語研究所が一九七七―一九八一年に行なった表現法の全国的調査の結果から、各種表現分野についての関西弁的特徴の具体例を示し、その分布の状況や特色を全国諸方言と対比しつつ考察する。

また、関西弁が中国・四国・九州や中部地方の一部に急速に浸透しつつある状況を示し、日本の方言の変化の方向について考える。